

## 人麿挽歌の創作意識

森 脇 一 夫

柿本人麿が万葉集にきわめて多くの挽歌をのこしていることはあまねく知られており、そのなかには皇子皇女の殯宮にささげる公的な意味をもつものと、身辺に偶発もしくは見聞した死の現実を哀傷して作った私的なもののあることも、またよく人の知るところである。

人麿挽歌の公的なものについては、かつて吉田義孝<sup>(1)</sup>氏や池田勉<sup>(2)</sup>氏が、天武殯宮の際の誄<sup>しゆげ</sup>から深い影響を受けているということを指摘せられたが、その後西郷信綱<sup>(3)</sup>氏も、人麿の殯宮挽歌は古来の誄を芸術化したもので、讚歌的な意味をもつ儀式的表現であるといわれ、伊藤博<sup>(4)</sup>氏は、これら殯宮挽歌は長大な装飾をもち、主人公の死を嘆く主想をうたいあげ葬儀の場で誄詠せられたものであらうと論ぜられた。秋間俊夫<sup>(5)</sup>氏のようにこれに反対する人もないではないが、これらの説を支持する学者が多く、ほぼ学界の承認を得たかに見られたが、最近吉永登<sup>(6)</sup>博士によって、人麿の献呈挽歌は死者に献ぜられたものではなく、生き残っている権力者持統女帝を意識して作られたもので、しかも殯宮で誄詠せられたものでないという新説が提出せられ、この問題に新たな一石が投ぜられた。

筆者もかねて吉永博士説に近い考えをもっていたので、その献呈挽歌創作動機説に深い興味を覚えるが、ここには人麿の挽歌のうち、皇子皇女らの殯宮の際に献呈せられたと思われるものを除く私的な作品について、その創作意識をさぐり、然るのちに公的な献呈挽歌にも触れてみたいと思う。

人麿が身辺の人々の不幸や、たまたま行きずりの路上にあわれな行路死者を見聞して作った私的な挽歌は、そのほとんどが制作の時期を明らかにしがたいので、順序不同にとりあげることとする。

柿本朝臣人麿、香具山に屍を見、悲慟<sup>かなし</sup>みて作れる歌一首

草枕旅のやどりに誰が夫<sup>つま</sup>か国忘れたる家待たまくに(三四二六)

香具山は、巻一の「藤原宮の御井の歌」(一五二)にも歌われていて、藤原京からは至近距離にある山である。古事記にも登場し、神話や伝説の多くまつわる当時の都びとにとっては親しみ深い山であったはずである。人麿は通説のように藤原京に奉仕する下級官吏であったとするならば、出仕の途次か何かたまたまこの山のほとりに、あわれな行路死者を見たのであろう。

こうした都に近い場所でも身元不明の行き倒れがあったというような事情については、かつて北山茂<sup>(?)</sup>氏が指摘せられたように、続日本紀などの記録にもしばしば見られるところである。

諸国<sup>シヨククニ</sup>役夫<sup>シヨククニ</sup>及<sup>シ</sup>運脚<sup>ウネカシ</sup>者<sup>シヨククニ</sup>、還<sup>ル</sup>郷<sup>シヨククニ</sup>之日<sup>シヨククニ</sup>、糧食<sup>シヨククニ</sup>乏<sup>シ</sup>少<sup>シヨククニ</sup>、無<sup>シ</sup>由<sup>シヨククニ</sup>得<sup>ル</sup>達<sup>スル</sup>(統紀五、和銅五二〇) 諸国<sup>シヨククニ</sup>庸調<sup>ウケテ</sup>脚夫<sup>シヨククニ</sup>、事畢<sup>シヨククニ</sup>帰<sup>ル</sup>郷<sup>シヨククニ</sup>、路遠<sup>シヨククニ</sup>糧絶<sup>シヨククニ</sup>、又<sup>シ</sup>行路<sup>シヨククニ</sup>病人<sup>シヨククニ</sup>無<sup>シ</sup>親恤<sup>シヨククニ</sup>養<sup>フ</sup>一<sup>シヨククニ</sup>、欲<sup>ス</sup>免<sup>ル</sup>飢<sup>シヨククニ</sup>死<sup>ス</sup>、餬口<sup>シヨククニ</sup>飯<sup>シヨククニ</sup>生<sup>ス</sup>、並<sup>シ</sup>辛<sup>シヨククニ</sup>苦<sup>シヨククニ</sup>途中<sup>シヨククニ</sup>、遂<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>横斃<sup>シヨククニ</sup>(統紀二〇、天平宝字九・一〇)

諸国<sup>シヨククニ</sup>調脚<sup>シヨククニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>還<sup>ル</sup>郷<sup>シヨククニ</sup>、或<sup>チ</sup>因<sup>テ</sup>病<sup>シヨククニ</sup>憂<sup>フ</sup>苦<sup>シヨククニ</sup>、或<sup>チ</sup>無<sup>シ</sup>糧<sup>シヨククニ</sup>飢<sup>シヨククニ</sup>寒<sup>ス</sup>(統紀二二、天平宝字三・五)

右はいずれも人麿の時代よりはやや後の記録であるが、事情はほとんど変っていないかと思われる。諸国の農民は徭役のために強制的に都に徴発せられ、調を運ぶために運脚となつてはるばる都にのぼらなければならなかったのである。しかも道中の糧食や費用は自弁であつたらしく、これらの記録によれば帰途の糧食がなくなり、あるいは病のために憂苦飢寒し、遂には横斃するというケースが非常に多かつたことを物語っている。万葉卷三には、上宮聖德皇子の竜田山の死人を見て悲傷して作られた「家にあらば妹が手まかむ草枕旅にこやせるこの旅人あはれ」(三四一五)があり、書紀にも同じ作者の「しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親なしに 汝なりけめや さす竹の 君はやなき 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ」というような作がある。

こうした悲惨な状態は、地方農民の負わされていた一般的な庸調制度の苛酷な実情であつたであらうと思われる。そうでなければ、こんな作品がそう幾つも作られるはずがない。これらの作品に共通な主題は、家郷の妻や親を思いやつているところにある。特に人麿の発想は、徹頭徹尾妻の立場に立ち、妻の愛情を裏打ちにして悲惨な死者に對しているところにある。「誰が夫か」とか「家持たまくに」などの詩句には、単なる傍觀者や路傍の人の口からは出るべくもないほどの温い心づかいが秘められている。

### 三

讃岐の狹岑島に石中の死人を視て、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか ここだ貴き 天地 日月とともに 満たりゆか  
む神の御面と 継ぎきたる 中の水門ゆ 船浮けて わが傍ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに 沖見れば とろ  
浪立ち 辺見れば 白浪さわく 鯨魚取り 海をかしくこみ 行く船の 楫引き折りてをちこちの 島は多けど  
名くはし 狹岑の島の 荒磯面に いほりて見れば 浪の音の 繁き浜辺を きたへの 枕になして 荒床に  
より臥す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉梓の 道だに知らず 鬱悒しく 待  
ちか恋ふらむ 愛しき妻らは (2220)

#### 反歌二首

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上の宇波疑過ぎにけらざや (2221)

沖つ波来寄る荒磯を敷細の枕と纏きて寝せる君かも (2222)

讃岐の狹岑の島というのは、現在香川県坂出市の沖合にある沙弥島であるといわれている。塩飽諸島中の一小島であつたが、近年この附近の海が埋め立てられて、坂出市からは陸つづきになつた。人麿がいかなる用件でこの地に行つたのかは明らかでないが、このあたりは当時四国の海岸沿いに内海筋の航路にあたつていたと思われ、長歌に歌われているように、中の水門（現在の中津港といわれる）から船出した人麿が強風を避けるためにこの島に立ち寄つたとき、たまたま巖窟の中に横たわる死人を見てこの歌をよんだものであらう。この歌は、その性質上、だれかに

贈るために作ったのではなく、ひそかにかれ自身の感懐を述べたものと思われるが、しかしその構成は、かれの公的挽歌にしばしば見られるように、長歌の前半は莊重な神話的叙述をとり、次にあわれな行路死者発見の事情を述べ、最後に死者の妻を思いやる詩句をもって結んでいる。死因は何であったか詳しくは知るべくもないが、当時の旅人にとつては、特にこの場合、小さな無人島に漂着したらしいこの旅人にとつては、餓死を想定するのをもっとも真実に近いであろう。反歌にうたわれた「宇波疑」は、本草和名や和名抄のしるすところによつて野草の嫁菜のことだといわれるが、嫁菜を摘んで食わせたなら命長らえることができただであらう、と思うのは悲しい妻の心情なのである。荒磯の岩を枕として横たわっている夫をいとしく思うのも妻の心情である。いづれにしても人麿がその妻なる人を思いやつて歌っているということは確かであらう。

#### 四

吉備津采女の死せし時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌

秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 思ひをれか たくなはの 長き命を 露こそは  
朝に置きて 夕は 消ゆと言へ 霧こそは 夕に立ちて 朝は 失すと言へ 梓弓 音聞く吾も ほの見し 事  
悔しきを しきたへの 手枕まきて つるぎ刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は さぶしみか おもひ  
て寝らむ 悔しみか おもひ恋ふらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと(2二二七)

#### 短歌二首

楽浪の志賀津の子らが一は云ふ、志賀津の子が罷道の川瀬の道を見ればさぶしも(2二二八)  
天數ふ大津の子があひし日におほに見しかば今ぞ悔しき(2二一九)

題詞には吉備津采女とあり、反歌には志賀津の子、大津の子とあつて、この女性がいかなる人物であつたかについてはさまざまの疑問があるが、歌の内容から考えて同一人物であることは、おおむね間違いないであらう。ここでは山田孝雄博士の説に従つて、吉備津采女は備中の国都宇郡出身の采女とし、志賀津の子、大津の子については、この女性が近江の国に由縁があつたためにそのようにも呼ばれたものと理解しておきたい。

さて人麿がなぜこの女性に關してかような挽歌を作ったかについて、鴻巢盛広氏の全釈に「当時美人の聞え高かつた、志賀津采女の死を惜しんだ歌である。美人の形容と、その死を惜しむ情がよく出てゐる」とあり、窪田空穂氏の評釈には「人麿がたまたま近江の大津へ行った時、前采女で、美しくして若く、以前一度見懸けたことのあつた人の今は人妻となつてそこに住んでゐる人が、河に身を投げて自殺をしたといふ話を聞き、強い衝動を受けて作つた歌である」と説明されている。また土屋文明氏の私注には「短歌の方をも加へて推測すると、入水自殺したもののごとく、その原因としては采女なのに、副い寝た夫のことを言つて居るのを見ると、男性に通じたことからの自殺といふ推測も不可能ではないであらう。(中略)或は采女の死が当時の巷間の大事件であり、人の話柄となつたものかも知れぬ。赤人、虫麿等に真間手児名の挽歌あり、福麿、虫麿、家持等に、芦屋処女の挽歌あるごときものではあるまいか」とある。鴻巢氏や窪田氏の説は一般的な理解の上に立っているが、土屋氏の説は万葉伝説歌の先驅として位置づけようとする新しい見方である。真間手児名や芦屋処女の挽歌には劇的構成がほぼ整っているが、人麿のこの作品にはまだその点の構成が十分でない。というよりも、人麿には生死の問題を劇的にとらえようとする意図がなかつたというのが正しいであろう。生命のはかなさを朝露や夕霧に喩える手法は人麿作品の常套である。多少面識があつたとしても、巷間に伝えられたこういう事件について客観的なとらえ方することなく、残された夫の立場でしか歌うことができなかったということに人麿の面目があるといつてよいであらう。

## 五

土形娘子を泊瀬山に火葬せし時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首

こもりくの泊瀬の山の山の際まにいさよふ雲は妹にかもあらむ(三四二八)

土形娘子は万葉考に「采女なる歎」といつているが、采女は国名もしくは郡名によつて呼ばれるのが通例で、土形は和名抄に遠江国城飼郡の地名には見えるけれども郡名には見あたらないので、采女でなかつたことは明らかである。鴻巢氏の全釈には「遊女らしく思われる」とあるが、そう考えられる理由はない。古事記中巻に「是大山守命者、土形君、弊岐君、榛原君等之祖」とあるので、この土形君の一族であらうと思われる。

わが国で火葬ということの行なわれた初めは、文武天皇の四年三月に僧道昭を火葬にしたという記事が続日本紀に見えるが、人麿の作もそれ以後あまり時日のたっていないころのものと思われるから、山田孝雄博士<sup>(9)</sup>の言われたように、当時にあつては稀有のこととして人の耳目を聳動せしめたために人麿もこれを作歌の題材にしたものと思われ。土屋文明氏<sup>(10)</sup>もこの歌の作意について「其の趣は卷二、吉備津采女の挽歌(二一七—二一九)の場合の如きものであつたらう」といつて、吉備津采女の場合と同じくその死が当時の一事件として人々の話題にのぼつたものと想像しているが、人麿の私的挽歌が当時の社会的事件に焦点をあたものであつたという見方には注意をはらうべきであらう。

この歌の場合、人麿と土形娘子とが親しい関係にあつたかどうかは全く不明であるが、歌の調べの上にはそれほど痛切な感情は見られず、親近関係はなかつたと見るのが妥当ではなからうか。むしろこの作は、夫とか恋人とか、そういう立場の人の心中を推量して、火葬の煙を擬人化したものであらう。

## 六

溺死にし出雲娘子を吉野に火葬せし時、柿本朝臣人麿の作れる歌二首

山の際ゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく(三四二九)

八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ(三四三〇)

出雲娘子という名も、国名の出雲か、あるいは出雲氏の娘子であるかわからないので、采女であるかどうか不明である。吉野川で溺死したのであることは四三〇番歌によつて知られる。窪田空穂氏<sup>(11)</sup>は「今の初瀬町の中に出雲と称する地がある。ここは古へ大和国から伊勢国へ出る要路に當つてをり、『出雲郷』として著名な地であつた。『溺死に』は吉野川においてのことと思はれるから『出雲郷』と見ると由縁<sup>(ゆかり)</sup>のなくはないことに思はれる」と言っている。溺死は吉備津采女の場合と同様に、自殺であらうと思われる。窪田氏の言うように、この娘子が初瀬出雲の少女であるとすれば、その自殺にはおそらく複雑なロマンスがからみ、真間手児名や芦屋処女の場合と同じようにさまざまな風評が立つたものと思われる。世評にのぼつた女性の死と、さらに当時としては珍らしい火葬にせられるということが人麿の関心をいざなつたのであらう。四二九番歌の構成は、土形娘子の挽歌に近似しており、ほとんど同じ時期の

作であろう。大和物語第一五〇段に、猿沢の池に身を投げた采女を人麿が哀悼したものと、「吾妹子がねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ悲しき」という歌をあげており、拾遺集にも柿本集にも人麿の作としている。出雲娘子の歌がこうした伝誦をはらんでいたことを示すものと考えてよいであろう。人麿と出雲娘子との関係も、土形娘子の場合と同じく、創作の動機もほとんど類を同じくするものと見られる。

七

柿本朝臣人麿、妻死せし後、泣血哀慟して作れる歌二首并に短歌

天飛ぶや 輕の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み まねく行かば 人知りぬべみ さね葛 のちも逢はむと 大船の 思ひたのみて 玉かぎる 磐垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れ去くが如 照る月の 雲隠る如 沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の 過ぎてい去くと 玉づさの 使の言へば 梓弓 声おとに聞きて一は云ふ、声のみ聞きて 言はむすべ 為むすべ知らに 声おとのみを 聞きてあり得ねば わが恋ふる 千重の一重も 慰むる 情もありやと 吾妹子が 止まず出で見し 輕の市に わが立ち聞けば 玉だすき 畝火の山に 鳴く鳥の 音こゑも聞えず 玉ぼこの 道行く人も 一人だに 似てし行かねば すべをみな 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる 或本、名のみを聞きてあり得ねばといへる句あり (二二〇七)

短歌二首

秋山の黄葉を茂みまどひぬる妹を求めむ山道知らずも 一は云ふ、路知らずして (二二〇八)  
黄葉の落り去くなへに玉づさの使を見れば逢ひし日念ほゆ (二二〇九)

うつせみと 念ひし時に一は云ふ、うつそみと念ひし 取り持ちて わが二人見し はしり出の 堤に立てる 榎の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 念へりし 妹にはあれど たのめりし 兎らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎりひの 燃ゆる荒野に 白たへの 天領布隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 吾妹子が 形見に置ける みどり兎の 乞ひ泣く毎に 取り与ふる 物し無ければ 男じもの 腋ばさみ持ち 吾妹子と 二人わが宿し 枕づく 孀屋の内に 昼はも うらさび暮し 夜はも 息づき明し 嘆けども

せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしを無み 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は坐すと 人の言へば  
石根さくみて なづみ来し 吉けくもぞなき うつせみと 念ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えぬ思  
へば(2110)

### 短歌二首

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる(2111)  
衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし(2112)

右二篇の挽歌については、代匠記は石見で別れた妻の死を詠んだものだと言い、考には前の一篇は忍んで通っていた女の死をいたみ、後の一篇は兎までであった嫡妻の死を嘆いたものであるとしているが、これについては考の別記の妻妾四人説をはじめ、多くの学者によってさまざまの推定が試みられている。近代の学者でも、鴻巣盛広、窪田空穂、佐佐木信綱、次田潤、沢瀧久孝らの諸氏は、この二篇の妻を別人と見る立場をとっておられるが、それには大した理由は認められず、山田孝雄博士の詳細な連作論によって、さらにまた、作の内容から見ても、二篇ともに一人の妻の死を悲しんだ同時の作と見てさしつかえはない。

さてこの二篇の挽歌の構成を見るに、二つの長歌とも最初のところに僅かに生前の妻の思い出が歌われているほかは、残された作者自身の感情に重点を置いて歌われている。短歌をも含めて、妻が哀れであるとか、死にゆく妻がいかに悲しかったであろうかというようなことはどこにも歌われてはいないのであって、あくまでも自分本位に歌っているのである。これは見かたによっては、第三者に対して、残された自分がいかに哀れであるかを印象づけようとしたものであると言えなくもない。

挽歌というものは、一般には死者をいたむ歌であるといわれているが、實際上、死者そのものをいたむというよりも、残された近親者のこころを慰めるといふ意識が強くはたらく場合が多いのではなからうか。妻の死を歌う場合にも、第三者を意識するのは当然であろうし、そうした第三者に対して、残された自分がいかに惨めであるかを訴えようとする気持がはたらいたとしても不思議はない。



柿本朝臣人麿、石見国にありて死に臨みし時、みづから傷みて作れる歌一首

鴨山の磐根し纏けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ(2二二三)

有名な人麿の自傷挽歌である。万葉には刑死をとげた人の自挽歌は幾つかあるが、これは病気による臨終の作と思われる。斎藤茂吉はこれについて、続日本紀慶雲四年四月の条に「天下疫飢、詔加賑恤」。但丹波、出雲、石見三国尤甚」とあるのに注目し、人麿はこのとき望扶斯が赤痢のような疫病で急死したのではあるまいかと言っている。この歌については鴨山の所在をめぐって古来多くの説があり、茂吉がこれに関して異常とも思える熱意をもって追求したこともあまねく知られている。

この一首のあらわすところは、上二句によって死を暗示し、そうした不吉な事実をつゆ知らぬ妻の上に思いを馳せたものであって、その妻なる人は、この歌につづいて載せられている歌の作者、依羅娘子であろうことは、多くの学者の一致した推定である。茂吉はこの歌のあらわす意味について、「一首の中心が、『妻をおもふ』情の切実な声調を以て統一せられてゐるのがその特色である。後世の臨終に近く咏む辞世といふ詩歌は、もつと哲学的であり宗教的であり、そして概念的であるのが多い。古代にあつても、例へば隋の釈智命が臨終詩に、幻生還幻滅、大幻莫過身、安心自有处、求人無有人とある如きもまたそれである。死は生の終焉であるから重大に感ぜられて、臨終の有情の言ふ事が哲学的になり、宗教的になり幽玄的になることもまた決して不自然ではない。けれども死に臨んで、『愛する妻をおもふ』といふことはまた極めて人間的で直接的で純粹である。万葉の挽歌を読めば、これに似た感慨のものが他にもある。『妻知らば来も問はましを』(巻二、二二〇)云々といふのはそれである」と言っている。茂吉が指摘したように、死人を見ては「妻知らば」と歌い、死に臨んで「知らにと妹が待ちつつあらむ」と歌つたのは、むろん人麿の人間的で直接的で純粹な性情によるのであろうが、そのことは茂吉のあげた一、二の例のみにとどまらず、人麿挽歌のすべてに通ずる根源的なものの集約がそこに見られるという方が正しいであろう。

人麿の私的挽歌のすべてを検討してみても言うことは、そのいずれもが直接に死者その人を哀れみいたむというよりも、残された近親者に同情し、または残されたものの立場に立って歌われたものが多いことである。土形娘子や出雲娘子やに関する挽歌のように、一見客観視した歌いぶりに見えるものでも、根源の創作動機には、やはり同様の意識がはたらいていると見ねばならない。

人麿が社会的事件としての死の問題を多く取りあげたことは、虫麿ら後代の歌人に強い影響をもたらしたのであるが、人麿には、そうした社会性についての敏感な詩的資質があったものと思われる。かれは宮廷歌人として多くの皇子や皇女の殯宮に挽歌を献呈する義務と機会をもったもののようにいわれているが、一方に、それらの公的挽歌に劣らぬほど多くの私的挽歌が存在することを、どのように説明すべきであろうか。私的挽歌が遺族から依頼せられて作られたものとは言えないように、公的挽歌も宮廷歌人の義務として作られたものとは言いがたいであろう。それはやはり、当時において皇族の死が社会的な一大事件として人麿の心に衝撃を与えたからにはかならず、創作の動機においては、私的挽歌の場合とほとんど変りなかつたものと思われる。

繰り返しかえし述べたように、人麿の私的挽歌は、死者その人に対して歌いかけるといふよりも、妻や夫のような残された近親者を意識し、またはその立場に立って歌われたものが多いのであるが、すでに創作の動機において大差のない公的挽歌も、やはり近親者を意識して作られたであろうと考えることは少しも差しつかえないことであるばかりか、むしろ当然のことと言うべきであろう。「皇子尊の宮の舍人等、慟傷して作れる二十三首」のごときも、人麿の手が加わったものと見られるすぐれた作であるが、この一連もなお悲嘆に沈む持統母帝を意識においた作と言つてよさそうである。

**追記** 本稿は、昭和四十三年六月二十二日に国学院大学で行なわれた故今井福治郎博士を偲ぶ会において発表した疎稿に、加筆したものである。

その席上でも話を添えたことであるが、今井博士には昭和二十九年三月に刊行された『早春挽歌』という歌文集が

あつて、それには愛嬢治子さんをとむらうための悲しくも美しい歌文が満ちあふれている。そのなかに、夫人をはじめ、親しい人々の回想や歌が収められているが、

嘆きつつ冬は深みぬ来む春も 千代子

花咲きながら過ぎて行くべし 白水

という、すぐれた巻頭の連歌をはじめ、夫妻の悲しい多くの挽歌を見ることが出来る。それらの作品のなかで、夫人の、

さびしさに同じく耐へてゐたまふや前ゆく夫のその後姿うしろなげ

ともどもに深きなげきを分けゆかむ夫のかなしき瞳に会ひぬ

二人のみに通ふなげきに触りにつつ酒欲る夫よかなしく思ふ

というような作にも感動を禁じ得ないし、また今井博士の、

吾が妻は亡き子の写真アルバムをただ一つ持ち故郷に行きぬ

ふるさとに帰りし妻は母とゐて習ひはじめし経よみをらむ

山巖の深く残れる雪に向き切なかるべし車房の妻は

などという作にも涙を禁じ得ない。亡くなられた愛嬢に手向けられた哀悼の情もさることながら、残されたもの同士の思いやりが痛切な挽歌となったものと思われる。挽歌とは本来こうした性質をもつものであるのかも知れない。

- 注1 文学昭和29年3月号「古事記の編纂事情について」、国語と国文学昭和39年11月号「天武殯宮の文学史的意義」
- 注2 成城文芸昭和29年10月号「人麿作歌の成立条件について」
- 注3 岩波講座日本文学「柿本人麿」
- 注4 国語国文昭和32年2月号「挽歌の誦詠——人麿殯宮挽歌の特異性——」
- 注5 文学昭和42年9月号「日並皇子挽歌論」
- 注6 万葉——文学と歴史のあいだ——
- 注7 奈良朝の政治と民衆
- 注8 万葉集講義
- 注9 万葉集講義
- 注10 万葉集私注
- 注11 万葉集評釈
- 注12 万葉集全釈
- 注13 万葉集評釈
- 注14 評釈万葉集
- 注15 万葉集新講
- 注16 万葉集評釈
- 注17 万葉集講義
- 注18 柿本人麿「人麿の死及び歿処」
- 注19 柿本人麿「評釈篇」